

ただいまカイゴ奮戦中

「自分と同じ介護者の体験を知りたい」「出口の見えない介護、思いを交流しあえたら」「少し息を抜くコツを教えてほしい」——本コーナーに読者から寄せられる声です。20年にわたり、仕事を続けながら実母を介護する神奈川県・Rさんの体験談を。

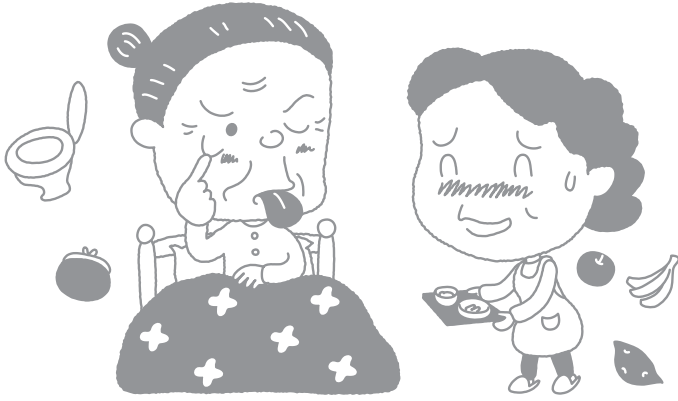


イラスト 井上ひいろ

突然の介護に「てんやわんや」

私が三五歳のとき、当時六三歳だった同居の母が脊髄小脳変性症を発症しました。それまで、家族全員が医者知らずで母の病気は晴天の霹靂^{へきれき}。てんやわんやで生活は一変しました。

母は八カ月間入院し、退院後は在宅での介護に。母の回復力は医師の予測をはるかに越え、ポータブルトイレへの移動に始まり、介助をすれば歩けるまでになっていきました。それから一二年は、同居していた父が介護をがんばってくれて、大いに助かりました。大変になったのは、父が亡くなって

から母が特別養護老人ホームに入所するまでの八年間。父が亡くなる少し前から、母は認知症を発症し、少しずつ進行していたのです。

生計の中心である私は仕事をやめるわけにはいかず、母の介護度の進行にあわせて、介護保険制度などさまざまな制度の活用を増やしていきました。

認知症による憎まれ口に「イラッ」

母は少しずつ、物事の理解度が低下し、そして暴言が増えていきました。

私に気持ちの余裕があれば、憎まれ口や暴言も笑ってすませられるのですが、疲れていたり体調が悪かったりすると、そうもいきません。ついついため息もでてしまいます。すると母は「ため息がでるのは私の方よ。コレ、ぜんぜんおいしくないわよ」などと憎まれ口をたたくので、「イラッ」。「それなら食べなくてもいいわよ」と言い返したものの、自己嫌悪に陥る。そんなことをくり返す毎日でした。

デイに「行ってみようかしら」と

父が介護していた頃は、「デイサービスなんて、知らない人のいるところになんか、絶対行かないわ」と言い張っていたのに、認知症発症後に「行ってみようかしら」と気持ちが変わりました。

ほっと介護

105

とは幸いでした。当日の朝になって、急に行くのを嫌がって困らせることもありましたが、お迎えに来て下さる方には素直に接していました。家と外の違いは意識していたようです。それでも帰ってくると「家でも外でも、おとなしくなんてできませんよーだ」などと言って、「あつかんべー」をするのでした。

トイレも悪戦苦闘

毎日の生活で一番苦労したのは、母の排便でした。もともと便秘症だったうえに、腹筋の衰え、飲水量・運動量の減少がみられました。薬を飲み、バナナやリンゴ、芋類などを意識的に食べさせていましたが、母はまったく違和感を感じないようでした。医師からは「せめて一週間に一度は排便を」と言われたので、私の仕事は休みの日は、まずおなかをマッサージして、せまいトイレに二人でこもって悪戦苦闘。ここでも、ため息をつこうものなら、私をつねったり蹴飛ばしたり。「これが毎日ともなれば、介護虐待がおこっても不思議ではないな」と思う日々でした。(つづく)